

映画「降りてゆく生き方」を脚本、製作した森田貴英弁護士に、氏の最近の興味や関心、感動したことや面白かったことなどを伺いましたので紹介します。

○ほんとうの「幸せ」を求めて

市民も行政も「幸せ」とは何かを考える機会を多様に設けることに知恵をしぼる必要がある。既に全国各地で経験が生まれ、志を同じくする人々の輪が広がっている。

○「心と体の健康」を求めて

現代は不安と絶望に満ちた、とても生きにくい社会。何はなくとも「心と体の健康」を維持することに全ての課題は行きつく。津軽でのりんご栽培（映画「奇跡のリンゴ」）、シルクロードでの天然蜂蜜づくりなど、無農薬、無肥料、自然栽培の農業を始めとして各地での取組みが繋がり、協力共同が進んでいる。

○「市民が役割」を求めて

武田鉄也主演の映画「降りてゆく生き方」は大手の映画会社の配給には乗らないため、市民が手弁当で上映会を準備することになる。上映会づくりは市民が楽しいし、つながるし、学習できるし、語る力はつくし、元気になると、いいことばかりである。楽しさや喜びを得られる体験と役割が必要だ。

○「市役所の役割」を求めて

職員自身が「おもしろい」「やってみたい」「市民にやって欲しい」との気持ちを大切にすること。そうすれば市民の心に火が付き市民は勝手にやってくれるもの。「市民の心に火をつける」ことが最新の行政の姿、役割だ。

森田弁護士と市長は、かつて福祉イベントで対談したことがあり、映画の題名が示すように市長のものの考え方や見方と一致する点が多いことから、今回全国市長会出席の機会に再会したものである。

国会議事堂を臨む緑濃い都心の一室に現れた森田氏は、40歳少々だが精悍で眼差しは鋭く、声は大きく言葉は明快である。面会時間のうち、一時間ほどは聞いているだけで、精いっぱいだった。

突然「職員には何が求められていると思うか」との矢のような質問。「感受性を鍛えることでしょうか」と、弱々しく答えると、間髪を入れず「感受性は十人十色であって、鍛えられるものではないでしょう。感性を鍛え問題関心を深めるということでしょう」と。「あっ、そうですね」と、こちらはタジタジ。

そして、「降りていく社会を実現するには、現場をよく見て、考え、市民とよく議論することですね」と、締めくくった。

濃密で刺激にあふれた会話は心地よい疲労感をもたらしてくれた。